

原因分析がすべて終了した出生年別統計

原因分析がすべて終了した 2014 年出生児の概況

2025 年 6 月 6 日時点

本集計の対象事例は、本制度の補償対象となった重度脳性麻痺事例のうち、原因分析がすべて終了した 2014 年出生の事例 326 件である。

なお、表に記載している割合は、計算過程において四捨五入しているため、その合計が 100%にならない場合がある。

I．再発防止分析対象事例における事例の内容

1. 妊産婦に関する基本情報

表 I -1 出産時における妊産婦の年齢

	初産・経産の別			
	初産婦		経産婦	
	件数	% ^{注)}	件数	% ^{注)}
20 歳未満	4	2.1	0	0.0
20 歳～24 歳	15	7.9	4	2.9
25 歳～29 歳	59	31.1	22	16.2
30 歳～34 歳	49	25.8	44	32.4
35 歳～39 歳	48	25.3	43	31.6
40 歳～44 歳	14	7.4	22	16.2
45 歳以上	1	0.5	1	0.7
合計	190	100	136	100

注) 「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I -2 妊産婦の身長

項目	件数	%
150cm 未満	17	5.2
150cm 以上～160cm 未満	185	56.7
160cm 以上～170cm 未満	110	33.7
170cm 以上	8	2.5
不明	6	1.8
合計	326	100

表 I-3 非妊娠時における妊産婦の BMI

項目	件数	%
やせ 18.5 未満	46	14.1
正常 18.5 以上～25 未満	224	68.7
肥満Ⅰ度 25 以上～30 未満	25	7.7
肥満Ⅱ度 30 以上～35 未満	5	1.5
肥満Ⅲ度 35 以上～40 未満	1	0.3
肥満Ⅳ度 40 以上	0	0.0
不明	25	7.7
合計	326	100

表 I-4 妊娠中の体重の増減

	非妊娠時における BMI							
	やせ (BMI18.5 未満)		正常 (BMI18.5 以上～ 25 未満)		肥満Ⅰ度 (BMI25 以上～ 30 未満)		肥満Ⅱ度以上 (BMI30 以上)	
	件数	% ^{注1)}	件数	% ^{注1)}	件数	% ^{注1)}	件数	% ^{注1)}
±0kg 未満	1	2.2	3	1.3	0	0.0	3	50.0
±0kg～+7 kg 未満	12	26.1	52	23.2	12	48.0	2	33.3
+7 kg～+12 kg 未満	26	56.5	117	52.2	7	28.0	1	16.7
+12 kg～+20 kg 未満	7	15.2	47	21.0	5	20.0	0	0.0
+20 kg 以上	0	0.0	3	1.3	0	0.0	0	0.0
不明	0	0.0	2	0.9	1	4.0	0	0.0
合計 ^{注2)}	46	100	224	100	25	100	6	100

注 1) 「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

注 2) 非妊娠時における BMI が不明の事例は、集計対象に含まない。

表 I-5 妊娠中の飲酒および喫煙の有無

	飲酒・喫煙の別			
	飲酒		喫煙	
	件数	% ^{注)}	件数	% ^{注)}
あり	6	1.8	10	3.1
なし	247	75.8	276	84.7
不明	73	22.4	40	12.3
合計	326	100	326	100

注) 「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I -6 妊産婦の既往・現病歴の有無

項目		件数	%
既往・現病歴あり		163	50.0
疾患 (重複あり)	婦人科疾患	53	16.3
	子宮筋腫	15	(4.6)
	子宮内膜症	7	(2.1)
	卵巣嚢腫	10	(3.1)
	その他の婦人科疾患	29	(8.9)
	呼吸器疾患 ^{注1)}	34	10.4
	喘息	29	(8.9)
	肺炎・気管支炎	4	(1.2)
	結核	0	(0.0)
	その他の呼吸器疾患	3	(0.9)
	循環器系疾患	13	4.0
	心疾患	9	(2.8)
	高血圧	3	(0.9)
	脳血管疾患	1	(0.3)
	内分泌・代謝系疾患	9	2.8
	甲状腺疾患	8	(2.5)
	糖尿病	1	(0.3)
	精神疾患	12	3.7
	自己免疫疾患	3	0.9
	その他の疾患 ^{注)}	105	32.2
既往・現病歴なし		161	49.4
不明		2	0.6
合計		326	100

注) 「その他の疾患」は、項目としてあげた疾患以外を集計しており、消化器疾患、腎・泌尿器疾患等である。

表 I-7 初産婦・経産婦の別

項目	件数	%
初産婦	190	58.3
経産婦	136	41.7
既往分娩回数	1回	79 (24.2)
	2回	49 (15.0)
	3回	7 (2.1)
	4回	0 (0.0)
	5回以上	1 (0.3)
	不明	0 (0.0)
合計	326	100

表 I-8 経産婦における既往帝王切開術の回数

項目	件数	%
0回	110	80.9
1回	13	9.6
2回	8	5.9
3回以上	1	0.7
不明	4	2.9
合計	136	100

2. 妊産経過

表 I-9 不妊治療の有無

項目	件数	%
不妊治療あり	49	15.0
治療内容	体外受精	25 (7.7)
	人工授精	8 (2.5)
	その他の治療 ^{注)}	14 (4.3)
	不明	2 (0.6)
不妊治療なし	266	(81.6)
不明	11	(3.4)
合計	326	100

注) 「その他の治療」は、排卵誘発剤使用等である。

表 I -10 単胎・多胎の別

項目		件数	%
単胎		309	94.8
双胎		17	5.2
膜性診断	二絨毛膜二羊膜双胎	8	(2.5)
	一絨毛膜二羊膜双胎	8	(2.5)
	一絨毛膜一羊膜双胎	1	(0.3)
	不明	0	(0.0)
三胎		0	0.0
合計		326	100

表 I -11 胎盤位置

項目	件数	%
正常	305	93.6
前置胎盤	3	0.9
低置胎盤	6	1.8
不明	12	3.7
合計	326	100

表 I -12 羊水量異常診断の有無

項目		件数	%
異常診断あり		44	13.5
診断内容	羊水過多	12	(3.7)
	羊水過少	8	(2.5)
	その他 ^{注)}	24	(7.4)
異常診断なし		235	72.1
不明		47	14.4
合計		326	100

注) 「その他」は、多い、少ないなどと記載されたものである。

表 I -13 産科合併症の有無

項目		件数	%
診断名 (重複あり)	産科合併症あり	281	86.2
	切迫早産 ^{注1)}	148	(45.4)
	常位胎盤早期剥離	62	(19.0)
	絨毛膜羊膜炎 ^{注2)}	54	(16.6)
	切迫流産	28	(8.6)
	妊娠高血圧症候群	35	(10.7)
	妊娠糖尿病	3	(0.9)
	臍帯脱出	9	(2.8)
	子宮破裂	4	(1.2)
	頸管無力症	4	(1.2)
	その他の診断名 ^{注3)}	191	(58.6)
産科合併症なし		44	13.5
不明		1	0.3
合計		326	100

注1) 「切迫早産」は、切迫早産と診断されていないが妊娠22週以降にリトドリン塩酸塩が処方された事例を含む。

注2) 「絨毛膜羊膜炎」は、胎盤病理組織学検査において絨毛膜羊膜炎と診断された事例である。

注3) 「その他の診断名」は、項目としてあげた疾患以外を集計しており、子宮筋腫や回旋異常等である。

3. 分娩経過

表 I -14 分娩経過における母体搬送の有無

項目		件数	%
施設区分 搬送元	母体搬送あり	47	14.4
	病院	11	(3.4)
	診療所	36	(11.0)
	助産所	0	(0.0)
母体搬送なし		279	85.6
合計		326	100

表 I -15 児娩出経路

項目	件数	%
経膈分娩	124	38.0
吸引・鉗子いずれも実施なし	88	(27.0)
吸引分娩	25	(7.7)
鉗子分娩	11	(3.4)
帝王切開術	202	62.0
予定帝王切開術	19	(5.8)
緊急帝王切開術	183	(56.1)
合計	326	100

表 I -16 娩出経路別児娩出時の胎位

	娩出経路			
	経膈分娩		帝王切開術	
	件数	% ^{注)}	件数	% ^{注)}
頭位	122	98.4	163	80.7
骨盤位	1	0.8	33	16.3
横位	0	0.0	4	2.0
不明	1	0.8	2	1.0
合計	124	100	202	100

注) 「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I -17 和痛・無痛分娩^{注)}の有無

項目	件数	%
あり	11	3.4
なし	315	96.6
合計	326	100

注) 「和痛・無痛分娩」は、硬膜外麻酔等を実施した事例である。

表 I -18 経膈分娩事例における初産・経産別分娩所要時間

	初産・経産の別			
	初産		経産	
	件数	% ^{注)}	件数	% ^{注)}
15 時間未満	50	70.4	50	94.3
15 時間以上～30 時間未満	17	23.9	1	1.9
30 時間以上	3	4.2	0	0.0
不明	1	1.4	2	3.8
合計	71	100	53	100

注) 「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I -19 経膈分娩事例における初産・経産別分娩所要時間（分娩第 1 期）

	初産・経産の別			
	初産		経産	
	件数	% ^{注)}	件数	% ^{注)}
15 時間未満	52	73.2	43	81.1
15 時間以上～30 時間未満	14	19.7	1	1.9
30 時間以上	2	2.8	0	0.0
不明	3	4.2	9	17.0
合計	71	100	53	100

注) 「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I -20 経膈分娩事例における初産・経産別分娩所要時間（分娩第 2 期）

	初産・経産の別			
	初産		経産	
	件数	% ^{注)}	件数	% ^{注)}
1 時間未満	40	56.3	38	71.7
1 時間以上～2 時間未満	18	25.4	5	9.4
2 時間以上	10	14.1	1	1.9
不明	3	4.2	9	17.0
合計	71	100	53	100

注) 「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I -21 初産・経産別破水から児娩出までの所要時間

	初産・経産の別			
	初産		経産	
	件数	% ^{注1)}	件数	% ^{注1)}
24 時間未満	79	73.1	64	85.3
24 時間以上～48 時間未満	9	8.3	2	2.7
48 時間以上	8	7.4	1	1.3
不明	12	11.1	8	10.7
合計 ^{注2)}	108	100	75	100

注 1) 「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

注 2) 帝王切開時に破水した事例は、集計対象に含まない。

表 I -22 子宮破裂の有無

項目		件数	%
子宮破裂あり ^{注1)}		4	1.2
既往の有無 子宮手術の有無	なし	2	(0.6)
	帝王切開術あり	1	(0.3)
	その他の子宮手術あり	1	(0.3)
	帝王切開術とその他の子宮手術あり	0	(0.0)
	不明	0	(0.0)
子宮破裂なし		322	98.8
不明 ^{注2)}		0	0.0
合計		326	100

注 1) 「子宮破裂あり」は、不全子宮破裂を含む。

注 2) 「不明」は、子宮破裂疑いのものを含む。

表 I -23 臍帯脱出の有無

項目		件数	%
臍帯脱出あり		9	2.8
関連因子 (重複あり)	経産婦	6	(1.8)
	子宮収縮薬 ^{注)} 投与	6	(1.8)
	人工破膜	0	(0.0)
	メトロイリールゼ法	4	(1.2)
	骨盤位	4	(1.2)
	横位	1	(0.3)
	羊水過多	1	(0.3)
臍帯脱出なし		314	96.3
不明		3	0.9
合計		326	100

注) 「子宮収縮薬」は、オキシトシン、プロスタグランジン F_{2α} 製剤、プロスタグランジン E₂ 製剤（経口剤）である。

表 I -24 分娩誘発・促進の処置^{注)}の有無

項目			件数	%
分娩誘発・促進あり			114	35.0
分娩誘発あり			44	13.5
処置 (重複あり)	薬剤 の 投 与	オキシトシン	32	(9.8)
		プロスタグランジン F _{2α} 製剤	7	(2.1)
		プロスタグランジン E ₂ 製剤 (経口剤)	19	(5.8)
	人工破膜		14	(4.3)
	メトロイリールゼ法		22	(6.7)
	吸湿性子宮頸管拡張器		3	(0.9)
分娩促進あり			70	21.5
処置 (重複あり)	薬剤 の 投 与	オキシトシン	33	(10.1)
		プロスタグランジン F _{2α} 製剤	2	(0.6)
		プロスタグランジン E ₂ 製剤 (経口剤)	1	(0.3)
	人工破膜		44	(13.5)
	メトロイリールゼ法		1	(0.3)
	吸湿性子宮頸管拡張器		0	(0.0)
分娩誘発・促進なし			211	64.7
不明			1	0.3
合計			326	100

注) 「分娩誘発・促進の処置」は、子宮収縮薬の投与、人工破膜、メトロイリールゼ法、吸湿性子宮頸管拡張器の挿入である。

表 I -25 人工破膜実施の有無

項目		件数	%
実施あり		58	17.8
子宮口の状態 (注)	人工破膜実施時の 0cm 以上～3cm 未満	1	(0.3)
	3cm 以上～7cm 未満	5	(1.5)
	7cm 以上～10cm 未満	7	(2.1)
	全開大	33	(10.1)
	不明	12	(3.7)
実施なし		265	81.3
不明		3	0.9
合計		326	100

注) 「子宮口開大度」について、「0cm～0cm」などと記載されているものは、開大度が小さい方の値とした。

表 I -26 人工破膜あり事例における人工破膜実施時の胎児先進部の高さ^{注)}

項目	件数	%
～-3	1	1.7
-2	5	8.6
-1	2	3.4
±0	4	6.9
+1	0	0.0
+2	0	0.0
+3	2	3.4
+4～	2	3.4
不明	42	72.4
合計	58	100

注) 「胎児先進部の高さ」について、「胎児先進部〇～〇」などと記載されているものは、先進部の位置が高い方の値とした。

表 I -27 急速遂娩^{注1)}の有無

項目	件数	%
急速遂娩あり	219	67.2
(重複あり) 適応	胎児機能不全	176 (54.0)
	分娩遷延・停止	24 (7.4)
	その他 ^{注2)}	51 (15.6)
	不明	3 (0.9)
急速遂娩なし	107	32.8
不明	0	0.0
合計	326	100

注1) 「急速遂娩」は、吸引分娩、鉗子分娩、緊急帝王切開術である。

注2) 「その他」は、胎盤異常、前置胎盤からの出血等である。

表 I -28 急速遂娩^{注1)}あり事例における急速遂娩決定^{注2)}から児娩出までの時間

	娩出方法 ^{注3)}					
	吸引分娩		鉗子分娩		帝王切開術	
	件数	% ^{注4)}	件数	% ^{注4)}	件数	% ^{注4)}
30分未満	7	28.0	5	45.5	40	21.9
30分以上～60分未満	2	8.0	0	0.0	44	24.0
60分以上	0	0.0	0	0.0	56	30.6
不明 ^{注5)}	16	64.0	6	54.5	43	23.5
合計	25	100	11	100	183	100

注1) 「急速遂娩」は、吸引分娩、鉗子分娩、緊急帝王切開術である。

注2) 「急速遂娩決定」は、最初の急速遂娩決定時刻である。

注3) 「娩出方法」は、最終娩出方法である。

注4) 「%」は、各郡の分析対象事例に対する割合である。

注5) 「不明」は、急速遂娩の決定時刻が不明なものである。

表 I -29 吸引娩出術実施の有無

項目	件数	%
実施あり	39	12.0
総牽引回数		
5回以内	31	(9.5)
6回以上	2	(0.6)
回数不明	6	(1.8)
実施なし	287	88.0
不明	0	0.0
合計	326	100

表 I -30 鉗子娩出術実施の有無

項目	件数	%
実施あり	14	4.3
総牽引回数		
1回	4	(1.2)
2回以上	6	(1.8)
回数不明	4	(1.2)
実施なし	312	95.7
不明	0	0.0
合計	326	100

表 I -31 緊急帝王切開術実施の有無

項目		件数	%
実施あり 緊急帝王切開術決定から 児娩出までの時間		183	56.1
	30分未満	44	(13.5)
	30分以上～60分未満	47	(14.4)
	60分以上	55	(16.9)
	不明 ^{注)}	37	(11.3)
実施なし		143	43.9
合計		326	100

注) 「不明」は、緊急帝王切開術の決定時刻が不明なものである。

表 I -32 子宮底圧迫法^{注)} 実施の有無

項目	件数	%
実施あり	45	13.8
実施なし	277	85.0
不明	4	1.2
合計	326	100

注) 「子宮底圧迫法」は、クリステレル胎児圧出法も含む。

表 I -33 分娩中の胎児心拍数聴取の有無

項目		件数	%
聴取方法 胎児心拍数	胎児心拍数聴取あり	320	98.2
	ドブラのみ	11	(3.4)
	分娩監視装置のみ	119	(36.5)
	両方	190	(58.3)
胎児心拍数聴取なし		6	1.8
不明		0	0.0
合計		326	100

表 I -34 胎児心拍数聴取あり事例における胎児心拍数異常の有無

項目	件数	%
異常あり	280	87.5
異常なし	39	12.2
不明	1	0.3
合計	320	100

表 I -35 臍帯巻絡の有無

項目	件数	%
臍帯巻絡あり	86	26.4
回数	1回	56 (17.2)
	2回	15 (4.6)
	3回以上	4 (1.2)
	回数不明	11 (3.4)
臍帯巻絡なし	216	66.3
不明	24	7.4
合計	326	100

表 I -36 臍帯の長さ

項目	件数	%
25cm 未満	2	0.6
25cm 以上～40cm 未満	67	20.6
40cm 以上～55cm 未満	140	42.9
55cm 以上～70cm 未満	62	19.0
70cm 以上	27	8.3
不明	28	8.6
合計	326	100

表 I -37 臍帯異常の有無

項目		件数	%
異常あり		79	24.2
所見 (重複あり)	辺縁付着	27	(8.3)
	卵膜付着 (前置血管を含む)	11	(3.4)
	捻転の異常	8	(2.5)
	単一臍帯動脈	4	(1.2)
	真結節	3	(0.9)
異常なし		111	34.0
不明		136	41.7
合計		326	100

4. 新生児期の経過

表 I -38 在胎週数

項目	件数	%
満 28 週	6	1.8
満 29 週	8	2.5
満 30 週	16	4.9
満 31 週	8	2.5
満 32 週	8	2.5
満 33 週	19	5.8
満 34 週	12	3.7
満 35 週	22	6.7
満 36 週	22	6.7
満 37 週	41	12.6
満 38 週	50	15.3
満 39 週	44	13.5
満 40 週	44	13.5
満 41 週	22	6.7
満 42 週	2	0.6
不明 ^{注)}	2	0.6
合計	326	100

注) 「不明」は、原因分析報告書に「在胎週数が不明」と記載されているが、審査委員会において、妊娠・分娩経過等から補償対象基準を満たす週数であると判断された事例である。

表 I -39 出生体重

項目	件数	%
1,000g 未満	9	2.8
1,000g 以上～1,500g 未満	23	7.1
1,500g 以上～2,000g 未満	39	12.0
2,000g 以上～2,500g 未満	68	20.9
2,500g 以上～3,000g 未満	101	31.0
3,000g 以上～3,500g 未満	72	22.1
3,500g 以上～4,000g 未満	10	3.1
4,000g 以上	0	0.0
不明 ^{注)}	4	1.2
合計	326	100

注) 「不明」は、蘇生処置等を優先したため、出生当日に体重を計測できなかった事例である。

表 I -40 出生時の発育状態^{注1)}

	在胎週数									
	28～32 週		33～36 週		37～41 週		42 週～		不明	
	件数	% ^{注2)}	件数	% ^{注2)}	件数	% ^{注2)}	件数	% ^{注2)}	件数	% ^{注2)}
Light for dates (LFD)	10	21.7	14	18.7	28	13.9	0	0.0	0	0.0
Appropriate for dates (AFD)	32	69.6	57	76.0	158	78.6	0	0.0	0	0.0
Heavy for dates (HFD)	4	8.7	4	5.3	11	5.5	0	0.0	1	50.0
不明 ^{注3)}	0	0.0	0	0.0	4	2.0	2	100	1	50.0
合計	46	100	75	100	201	100	2	100	2	100

注1) 「出生時の発育状態」は、「在胎週数別出生時体重基準値（2010 年）」に基づいている。

注2) 「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

注3) 「不明」は、在胎週数や出生体重が不明の事例および「在胎期間別出生時体格標準値（2010 年）」の判定対象外である妊娠 42 週以降に出生した事例である。

表 I -41 新生児の性別

項目	件数	%
男児	177	54.3
女児	149	45.7
合計	326	100

表 I -42 アプガースコア^{注1)}

	生後経過時間			
	1 分		5 分	
	件数	% ^{注2)}	件数	% ^{注2)}
0～3 点	175	53.7	107	32.8
4～6 点	54	16.6	76	23.3
7～10 点	90	27.6	131	40.2
不明	7	2.1	12	3.7
合計	326	100	326	100

注1) 「アプガースコア」について、「〇点～〇点」などと記載されているものは、点数が低い方の値とした。

注2) 「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I -43 臍帯動脈血ガス分析実施の有無

項目	件数	%
実施あり	259	79.4
臍帯動脈血ガス分析値 pH		
pH6.7 未満	29	(8.9)
pH6.7 以上～6.8 未満	19	(5.8)
pH6.8 以上～6.9 未満	14	(4.3)
pH6.9 以上～7.0 未満	17	(5.2)
pH7.0 以上～7.1 未満	20	(6.1)
pH7.1 以上～7.2 未満	28	(8.6)
pH7.2 以上	122	(37.4)
疑義 ^{注1)}	4	(1.2)
不明	6	(1.8)
実施なし	49	15.0
不明 ^{注2)}	18	5.5
合計	326	100

注1) 「疑義」は、検査エラーとされたものである。

注2) 「不明」は、採取時期が不明なもの、臍帯動脈血か臍帯静脈血かが不明なものを含む。

表 I -44 新生児蘇生処置^{注1)}の実施の有無

項目		件数	%
実施あり		250	76.7
処置 (重複あり)	人工呼吸 ^{注2)}	244	(74.8)
	気管挿管	200	(61.3)
	胸骨圧迫	94	(28.8)
	アドレナリン投与	61	(18.7)
上記のいずれも実施なし		76	23.3
合計		326	100

注1) 「新生児蘇生処置」は、第6回再発防止に関する報告書までの分析対象事例では、生後30分以内に実施した蘇生処置を集計している。第7回再発防止に関する報告書以降の分析対象事例では、生後28日未満に実施した蘇生処置を集計している。

注2) 「人工呼吸」は、バッグ・マスク、チューブ・バッグ、マウス・ツー・マウス等である。

表 I -45 新生児搬送^{注1)}の有無

項目	件数	%
新生児搬送あり	165	50.6
新生児搬送なし ^{注2)}	161	49.4
合計	326	100

注1) 「新生児搬送」は、生後28日未満における他の医療機関への搬送のことである。

注2) 「新生児搬送なし」は、当該分娩機関のNICUまたは小児科等に入院した事例を含む。

表 I -46 新生児期の診断^{注1)}の有無

項目		件数	%
診断あり		296	90.8
診断名 (重複あり)	低酸素性虚血性脳症	123	(37.7)
	動脈管開存症	102	(31.3)
	頭蓋内出血	73	(22.4)
	呼吸窮迫症候群	45	(13.8)
	低血糖	43	(13.2)
	新生児遷延性肺高血圧症	33	(10.1)
	多嚢胞性脳軟化症	31	(9.5)
	播種性血管内凝固症候群 (DIC)	30	(9.2)
	新生児一過性多呼吸	22	(6.7)
	脳梗塞	18	(5.5)
	脳室周囲白質軟化症	16	(4.9)
	高カリウム血症	16	(4.9)
	胎便吸引症候群	15	(4.6)
	新生児貧血	13	(4.0)
	帽状腱膜下血腫	11	(3.4)
	B群溶血性連鎖球菌 (GBS) 感染症	2	(0.6)
	その他の診断名 ^{注2)}	252	(77.3)
診断なし		30	9.2
合計		326	100

注1) 「新生児期の診断」は、原因分析報告書に記載されている生後28日未満の診断であり、原因分析委員会で判断されたものを含む。

注2) 「その他の診断名」は、項目としてあげた診断名以外を集計しており、高ビリルビン血症や頭血腫等である。

Ⅱ．再発防止分析対象事例における状況および診療体制

1. 分娩の状況

表Ⅱ-1 曜日別件数

項目	件数	%
月曜日	69	21.2
火曜日	49	15.0
水曜日	48	14.7
木曜日	52	16.0
金曜日	46	14.1
土曜日	28	8.6
日曜日	34	10.4
合計	326	100

表Ⅱ-2 出生時間帯別件数

項目	件数	%
0 時～7 時台	85	26.1
8 時～15 時台	138	42.3
16 時～23 時台	103	31.6
合計	326	100

表Ⅱ-3 施設区分別件数

項目	件数	%
病院	231	70.9
診療所	93	28.5
助産所	2	0.6
合計	326	100

表Ⅱ-4 都道府県^{注)} 別件数

項目	件数	項目	件数	項目	件数
北海道	15	石川	7	岡山	9
青森	2	福井	2	広島	2
岩手	1	山梨	5	山口	1
宮城	4	長野	4	徳島	2
秋田	0	岐阜	5	香川	3
山形	3	静岡	6	愛媛	3
福島	3	愛知	27	高知	4
茨城	2	三重	6	福岡	22
栃木	6	滋賀	4	佐賀	2
群馬	1	京都	9	長崎	6
埼玉	22	大阪	21	熊本	10
千葉	17	兵庫	22	大分	2
東京	35	奈良	1	宮崎	1
神奈川	15	和歌山	2	鹿児島	4
新潟	1	鳥取	0	沖縄	5
富山	1	島根	1	合計	326

注) 「都道府県」は、当該分娩機関所在地を指す。

2. 診療体制

表Ⅱ-5 病院における診療体制

項目		件数
救急医療機関	あり	197
	初期	3
	二次	101
	三次	93
	なし	25
	不明	9
	合計	231
周産期指定	あり	157
	総合周産期母子医療センター	65
	地域周産期母子医療センター	92
	なし	73
	不明	1
	合計	231

表Ⅱ-6 診療所および助産所における産科オープンシステム^{注)}登録の有無

項目	診療所	助産所
登録あり	8	0
登録なし	85	2
不明	0	0
合計	93	2

注) 「産科オープンシステム」は、産科セミオープンシステムを含む。

表Ⅱ-7 病院および診療所における分娩機関の病棟

病棟	病院	診療所
産科単科病棟	83	38
産婦人科病棟	86	55
他診療科との混合病棟	61	0
不明	1	0
合計	231	93

表Ⅱ-8 年間分娩件数

	施設区分		
	病院	診療所	助産所
200 件未満	13	8	2
200 件以上～400 件未満	34	23	0
400 件以上～600 件未満	45	28	0
600 件以上～800 件未満	52	23	0
800 件以上～1,000 件未満	37	7	0
1,000 件以上～2,000 件未満	42	4	0
2,000 件以上	8	0	0
不明	0	0	0
合計	231	93	2

表Ⅲ 脳性麻痺の主たる原因について

表Ⅲ-1 原因分析報告書において脳性麻痺発症の主たる原因として記載された病態^{注1、2)}

病態		件数	%
原因分析報告書において主たる原因として単一の病態が記載されているもの		138	42.3
胎盤の剥離または胎盤からの出血	胎盤の剥離または胎盤からの出血	51	15.6
	常位胎盤早期剥離	51	(15.6)
	前置胎盤・低置胎盤の剥離	0	(0.0)
臍帯因子		30	9.2
	臍帯脱出	4	(1.2)
	臍帯脱出以外の臍帯因子 ^{注3)}	26	(8.0)
感染		5	1.5
	GBS 感染症	1	(0.3)
	ヘルペス脳炎	1	(0.3)
	その他の感染 ^{注4)}	3	(0.9)
児の頭蓋内出血		10	3.1
子宮破裂		4	1.2
双胎における血流の不均衡（双胎間輸血症候群を含む）		4	1.2
胎児母体間輸血症候群		2	0.6
母体の呼吸・循環不全		1	0.3
	羊水塞栓症	1	(0.3)
	羊水塞栓症以外の母体の呼吸・循環不全	0	(0.0)
児の脳梗塞		16	4.9
胎盤機能不全または胎盤機能の低下 ^{注5)}		1	0.3
その他 ^{注6)}		6	1.8
原因分析報告書において主たる原因として複数の病態が記載されているもの ^{注7)}		25	7.7
(重複あり)	臍帯脱出以外の臍帯因子	17	5.2
	胎盤機能不全または胎盤機能の低下	4	1.2
	感染 ^{注8)}	0	0.0
	常位胎盤早期剥離	2	0.6
原因分析報告書において主たる原因が明らかではない、または特定困難と記載されているもの		163	50.0
	脳性麻痺発症に関与すると推定される頭部画像所見 ^{注9)} または産科的事象 ^{注10)} あり ^{注11)}	124	38.0
	妊娠 ^{注12)} ・分娩期の発症が推測される事例	115	(35.3)
	新生児期 ^{注13)} の発症が推測される事例	9	(2.8)
	脳性麻痺発症に関与すると推定される頭部画像所見または産科的事象なし ^{注14)}	39	12.0
	脳性麻痺発症の原因は不明である事例	33	(10.1)
	先天性要因 ^{注15)} の可能性があるまたは可能性が否定できない事例	6	(1.8)
合計		326	100

注1) 本制度は、在胎週数や出生体重等の補償対象基準を満たし、重症度が身体障害者障害程度等級1級・2級に相当し、かつ児の先天性要因および新生児期の要因等の除外基準に該当しない場合を補償対象としている。このため、分析対象はすべての脳性麻痺の事例ではない。

注2) 原因分析報告書において脳性麻痺発症の主たる原因として記載された病態を概観するために、胎児および新生児の低酸素・酸血症等の原因を「脳性麻痺発症の主たる原因」として、原因分析報告書の「脳性麻痺発症の原因」をもとに分類し集計している。

注3) 「臍帯脱出以外の臍帯因子」は、臍帯付着部の異常や臍帯の過捻転等の形態異常の所見がある事例や、形態異常等の所見がなくとも物理的な圧迫が推測される事例である。

注4) 「その他の感染」は、子宮内感染等である。

注5) 「胎盤機能不全または胎盤機能の低下」は、妊娠高血圧症候群に伴うもの等である。

注6) 「その他」は、1%未満の病態であり、児のビリルビン脳症、児の低血糖症、高カリウム血症等が含まれる。

注7) 「原因分析報告書において主たる原因として複数の病態が記されているもの」は、2～4つの原因が関与していた事例であり、その原因も様々である。常位胎盤早期剥離や臍帯脱出以外の臍帯因子等代表的なものを件数として示している。

注8) 「感染」は、GBS 感染症やヘルペス脳炎ではなく、絨毛膜羊膜炎や子宮内感染等である。

注9) 「頭部画像所見」は、児の頭部画像所見からの診断による破壊性病変（低酸素性虚血性脳症、脳室周囲白質軟化症等）である。

- 注 10) 「産科的事象」は、臍帯血流障害、常位胎盤早期剥離、胎盤機能不全等である。
- 注 11) 破壊性病変が生じた原因が解明困難であるとされた事例、産科的事象を複数認め特定困難とされた事例等である。
- 注 12) 妊娠期の要因は、脳の形態異常が形成段階で生じたことが明らかであり、かつ、その脳の形態異常が重度の運動障害の主な原因であることが明らかである場合は除外している。詳細は、本制度のホームページ「補償対象となる脳性麻痺の基準」の解説に記載している。
- 注 13) 新生児期の要因が存在しても、それが「脳性麻痺の原因となり得る分娩時の事象」の主な原因であることが明らかではない場合や重度の運動障害の主な原因であることが明らかではない場合は、除外基準には該当しないと判断されている。詳細は、本制度のホームページ「補償対象となる脳性麻痺の基準」の解説に記載している。
- 注 14) 破壊性病変や産科的事象を認めず、脳性麻痺発症の原因が不明、または解明困難とされた事例である。
- 注 15) 先天性要因が存在しても、それが「脳性麻痺の原因となり得る分娩時の事象」の主な原因であることが明らかではない場合や重度の運動障害の主な原因であることが明らかではない場合は、除外基準には該当しないと判断されている。詳細は、本制度のホームページ「補償対象となる脳性麻痺の基準」の解説に記載している。